

『#別れを告げない』（ハン・ガン著）を読んでみた。著者は韓国の小説家。父、兄も小説家。2024年にアジア人女性として初めてノーベル文学賞を受賞した。本作で第76回読売文学賞（研究・翻訳賞）受賞。フランスのメディシス賞、エミール・ギメ アジア文学賞受賞作。

いま生きる力を取り戻そうとする女性同士が、歴史に埋もれた人々の激しい記憶と痛み（済州島4・3事件）を受け止め、未来へつなぐ再生の物語である。ノーベル文学賞を村上春樹が受賞できなくて（地下鉄サリン事件を扱っているが）、著者ができた理由は、「歴史のトラウマと向き合い、人の命のはかなさをあらわにする強度の高い詩的散文にしあげている」からではないか。

著者は『少年が来る』で、1980年の光州事件（これも虐殺事件）を題材にしている。この事件では、民主化を求める市民や学生が軍による武力弾圧を受け、多くの犠牲者が出た。著者は光州出身であり、この歴史的な出来事を綿密な資料調査をもとに描いている。韓国国内外で高く評価され、光州事件の記憶を後世に伝える重要な文学作品の一つとなっているそうだ。こちらも是非読んでみよう。

ノーベル賞作家といえば、大江健三郎氏が1967年に発表した『万延元年のフットボール』を思い出す。故郷の村には百年前の万延元年の一揆の記憶が残っている。主人公は村の若者たちを率いてフットボール・チームを結成し、次第に暴力的な行動へと傾いてゆき、破滅的な道を進んでゆく。歴史の繰り返しや個人の運命をテーマにしている（庶民は歴史から学んでも、為政者は学ばない）。

済州島4・3事件は、1948年4月3日から1954年9月21日までの間に韓国の済州島で発生した武装蜂起と、それに対する政府側の鎮圧による大規模な虐殺事件である。

第二次世界大戦後、朝鮮半島は北緯38度線を境に南北に分断され、南側は米国軍政の統治下に置かれた。1948年には南側で単独選挙が実施されることが決定されたが、これに反対する勢力が済州島で抗議運動を展開した。

1948年4月3日に済州島の左派勢力（南朝鮮労働党など）が武装蜂起し、警察や右派勢力を攻撃した。それに対して韓国政府は鎮圧のために軍や警察を投入し、反乱勢力だけでなく一般住民に対しても厳しい弾圧を行った。政府軍は反乱勢力の掃討を名目に、済州島の村々を焼き払う「焦土作戦」を実施し、これにより、数万人の島民が犠牲（死者は3-6万人で、島民の約5分の1）とな

った。多くの住民が国外へ逃亡し、済州島の人口は一時的に 28 万人から 3 万人弱 にまで激減した。

長らく韓国政府によって本事件はタブー視されてきたが、1999 年に韓国政府が公式に謝罪し、2003 年には盧武鉉大統領が犠牲者に対する補償を表明した。現在では済州島に慰霊碑が建てられ、事件の記憶を伝える取り組みが続けられている。

現在のイスラエルによるパレスチナのガザと同じような虐殺が行われていたのに、本作を読むまで全く知らなかった。